

第44歩

米セント・ピーターズバーグ市との姉妹都市提携60周年

昭和51年（1976年）、高校2年生の夏休み、私は初めてアメリカ合衆国を訪れました。アメリカ生まれで、戦争中に日本に引き揚げてきた叔父が、30数年ぶりに生まれ故郷を訪問するのに、一緒について行ったのです。叔父の故郷はシアトル郊外の農業地帯。洗練された都市であるシアトルの魅力と、広大な牧草地帯を犬と馬が牛を追っかけるカウボーイ劇さながらの農場の開放感、屋外でのバーベキューパーティーのTボーンステーキの大きさなどに16歳の高校生であった私は圧倒され、目眩がしそうなほどのカルチャーショックを受けました。一方で、アメリカ独立200周年の記念コイン等を土産に買いながら、2000年以上の歴史がある日本の国や文化を誇らしく思えたことも確かです。

そんな私の初渡米の15年も前の昭和36年（1961年）、高松市は遠く離れたアメリカ合衆国の東海岸南部フロリダ州のセント・ピーターズバーグ市と姉妹都市提携を結びました。発端は、市議会で「夢多い青少年に海外研究の機会を与えるべき」という趣旨の質問がなされたことにあります。その思いに沿って、提携から60余年の間に、高松市から職員を研修派遣し、高松第一高等学校にはエッカード大学卒業生の英語教師の派遣を受け、両市の高校生が親善研修生としてホームステイを行い、障がい者の芸術活動を支援する団体が相互に交流を行うなど、様々で活発な交流が行われてきました。そして今回、コロナ禍を乗り越えて、これら親善交流事業等を継続、復活することが合意されました。

私の体験談を持ち出すまでもなく、若者にとっての国際経験は極めて貴重です。60数年前、未だアメリカ本土へ直行便すら飛んでいなかった時代に、青少年のためにと姉妹都市提携の決断をした先人の熱き思いに心から敬意を払いたいと思います。

